

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 池田 節子

本論文は、『源氏物語』を織りなす言葉の徹底的に緻密な分析を通して、この物語における人物造型や心理描写、あるいは物語生成の方法を克明に分析したものである。

論文の構成は、「第一篇 源氏物語の言葉」「第二篇 主題と人物」「第三篇 源氏物語の月日設定」および「付篇 平安文学の言葉」からなるが、『源氏物語』における類型的なものとの反復と変奏の様相への着眼が、論文全体を一貫している。すなわち本論文は、『源氏物語』において、ある類似した表現や、場面・状況などの類型が、反復されながら変奏されていくそのありかたを通して、ひだ深い心理や複雑な人間関係の葛藤が織りなされている様態を提示し、その反復が複雑多様な物語世界に様式的な統一感をもたらしている点を精緻に分析し、明らかにしたものである。

「第一篇 源氏物語の言葉」では、語彙や文章のレベルでの反復と変奏を分析し、とくにある人物にいくつかの特定の同語群が繰り返し用いられることによって、その人物の基調的なものが確保されていることを指摘している。またこの第一篇では、『源氏物語』に特徴的な語彙や表現を析出し、それらを『紫式部日記』『蜻蛉日記』『枕草子』『栄花物語』などと比較することで、『源氏物語』の表現の独自性および『紫式部日記』や『蜻蛉日記』との共通性を明らかにしており、平安朝文学のすぐれた文体史研究にもなっている。

「第二篇 主題と人物」では、語彙や文章レベルよりもさらに大きな、作中人物の心理や性格、人間関係、場面や状況といったレベルにおける反復と変奏の位相に照明が当てられている。また「第三篇 源氏物語の月日設定」は、この物語におけるさまざまなできごとの月日設定の類型性を分析したものである。

『源氏物語』には、その細やかな心理描写も含めて、すぐれて写実的な小説的達成が認められるが、しかしながらその写実性は、近代的な小説とはいかにも異質な印象を与える。本論文は、上述のようなさまざまなレベルでの類型的な要素の反復と変奏の様相を犀利に分析することで、写実性と様式性とが調和したこの物語の表現の稀有なありようを手取るように明らかにする。『源氏物語』における類型的な表現の反復と変奏をかくも精緻に分析した論考は、これ以前には存在しない。

第一篇における言葉の用例の抽出方法やその解釈には、必ずしも異論の余地がないわけではなく、また個々の事例の分析を統合していく際の論述がやや平板に流れるきらいもあるなど、若干の不満もなしとしないのであるが、しかしながらそれは、上記のような本論文の全体的な意義をいささかも減ずるものではない。よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。